

大いなる女神

山
北

登

今からおよそ四千五百年のむかし。

弓の形に並んだ日本列島の中でも北寄りの一角、のちに〈出羽の国〉と呼ばれることになる地方でヤムは生を享けた。

その地方の中ほどには〈大いなる川〉と、〈小なる川〉の、二つの川が流れている。

〈大いなる川〉はサケが多く捕れ、〈サケの村〉を潤した。〈小なる川〉ではアユが多く捕れ、〈アユの村〉を潤した。

ヤムが生まれたのは、〈サケの村〉だ。

村は、〈大いなる川〉を見下ろす丘にあった。丘のまわりにはクリの林が広がり、さらなる奥はトチの森やナラの森へと通じている。毎年秋の収穫期が来ると、村人たちが森に入り、ドングリやクリの実拾いをする。採ってきた実は村に集められ、大きな穴に埋めておく。豊作の年は一年がかりで食べても食べきれないほどのクリやドングリが集まった。

秋は丘を下った先の〈大いなる川〉に、たくさんサケが上ってくる季節でもあった。男たちは丸木舟に乗り、浅瀬に仕掛けた網にサケの群れを追い込む。このときも村では食べきれないほどのサケが捕れる。干したサケはよその村との交易で、〈黒石〉や塩、海魚、貝などと交

換される。いつの頃からか村は、「サケの村」と呼ばれるようになった。

ヤムは、サケ漁の日を迎えるたび憂鬱になる。彼は漁が得意でなかった。

サケ漁だけではない。村の男であれば誰でも当然のように求められる仕事——弓矢や槍を使って森のシカやウサギを捕ったり、水辺で力モやガンを捕ったり、食料を埋める穴を掘ったり、森から木を伐り出し縄で村まで曳ひいてきたり、家を建てるために重い柱を立てる手伝いをしたり、屋根に上って萱かややスキの葉を葺いたり——力の要るそれらの仕事で、ヤムはどれも苦手なのだ。

月足らずで生まれたヤムは、幼いときから体が弱かった。村で生まれた子供のうち、半分以上は成年を迎えることなく、病気やけがで命を落とす。生まれてから十五年目の冬を乗りきるまで生き延びた者は、成年を迎える儀式の際、男も女も顔に刺青を入れる。その年までヤムはとても生きられないだろうと、父も母も思っていたのだという。

そんなヤムが予想外のしぶとさで生き延び、今年の春、顔に刺青を入れた。泉に映る自分の顔を見るたび、ヤムは喜びに震える。自分はとうとう村の男になったのだ。これからは男の一員として働くのだ、と思った。

そんなヤムの体は、村の男たちと比べてひとまわり以上小さかった。狩りや漁、材木運びで鍛え上げられた彼らの逞たくましい肉体と並んでみると、腕も脚も細く胸板の薄いヤムの体はどうし

ても見劣りがする。大人の男なら一人でも曳ける小ぶりの木ですら、ヤムが曳こうとすると押しでも引いても動かなかった。

雪の森へ獲物を求める冬の狩りも、ヤムにとつては今から気が重い仕事だったが、サケ漁は特に苦手だった。一度に多くのサケを捕るために、村の男たちは連携し、おのおの丸木舟を操らなければならぬ。サケがひしめく川は流れも速く、一瞬でも気を抜くと舟から落ちてしまふ。舟を操ることが下手なヤムは何度も川に落ち、男たちに助けられた。そのたびに漁は中断を余儀なくされ、男たちの不機嫌な声を浴びることになる。

半人前。

出来そこない。

役立たず。

胸をえぐるような言葉に、ヤムの心は深く傷ついた。

長老の家を建て替える際には、ヤムも手伝いをさせられた。家を一軒建てるのは、村の男たちが全員で力を合わせなければならぬ重労働だ。古い家を壊し、傷んだ柱を運び出す。長老の住む家は家族が増えたため、新しい家は床もひとまわり大きく広げることになっていた。握り棒や大きな木のへらを使って穴を掘る作業は、力の弱いヤムにとつては苦手な仕事のひとつだ。何よりもつらいのは、森から切り出したクリの木の柱を柱穴に立てる作業だった。村の男た

ちが声を合わせて手綱を引き、太い柱を少しずつ立てていくのだが、柱がなかなか立ち上がらないと、男たちから罵声を浴びることになる。ヤムの力が誰よりも弱いことを、彼らはよく知っているのだ。ヤムはヤムなりに一生懸命手綱を引いているのだが、ヤムの加わる組の綱は、必ず反対側の綱に負ける。柱は傾き、向こうの男たちが危うく下敷きになりかけた。ヤムのように力が弱く、半人前の働きしかできない男は、共同作業の場では迷惑な存在でしかない。

自分は女に生まれた方がよかった。

女ならば、男の力仕事をしなくても済む。

そんなことを思つては、近ごろのヤムはため息をつくことが多くなつた。狩りやサケ漁、材木運びに家作りといった男の仕事よりも、土器作りや衣縫い、ヒスイ磨き、骨の加工といった、女の仕事の方にヤムは興味を惹かれた。子供の頃から土をこねる母に寄り添い、器作りを間近で見てきた。時には余つた土を手にとつて、見よう見まねで思いついた形を作つてみたこともある。

あるとき、幼いヤムの作つたその形を見て母がうれしげな声をあげた。

「ほう、これはミミズクだね」

小さなヤムから見れば、母の手は大きい。その母の手の中に、少年ヤムの〈作品〉はすっぽりと包まれてしまう。そんな小さい玩具のような形ではあつたが、いつかキノコ摘みの手伝い

で母と森へ行つたとき、クリの木の枝にとまってじつとこちらを見ていた一羽のミミズクを、ヤムなりに表したつもりであつた。その形を見た母が、ひと目でミミズクと見抜いたのだ。そのことがうれしかった。母はそのミミズクを土器と一緒に焼いてくれた。

それ以来ヤムは、余つた土をこねてはいろいろな動物や鳥の形を作つた。

ウサギ。

ムササビ。

リス。

カメ。

キジ。

カラス。

村で飼われている犬。

そのたびに母はそれらの小さな獣や鳥たちを土器と一緒に焼き、家のあちこちに並べてくれた。家が獣や鳥たちでいっぱいになっていくのは愉快な光景だつた。

母はヒスイを使つて勾玉を作る名人でもある。ヒスイは、〈大いなる川〉をずっと上流まで遡り、さらにその先の山々を越えたはるか彼方、村の誰もがまだ足を踏み入れたことのない

〈コシ〉の国から旅人が運んでくる。

ヒスイの石を一個手に入れるためには、干したサケ何匹分か、または大きな袋いっぱい詰めたクリと交換しなければならぬ。それほど貴重な石だった。その硬い石を丹念に磨いてつやを出し、小さな孔を開けるのは根気の要る作業だ。下手に磨いたり、孔を開けそこねたりすると、大切な石を台無しにする。村でヒスイの勾玉を作れるのは、母ひとりだけだった。長老が首飾りにしている勾玉も、母が作ったものだ。

母の土器作りやヒスイ磨きを間近に見て育ったせいも、ヤムは子供のころから手先が器用だった。よその子供が森を駆け回って遊んでいる間、家の前で細い枝を動かし、地面に獣や鳥の絵を描いて遊んだ。それがいつか役に立つ日が来るとは、そのころは思ってもいなかった。

とはいえヤムは、男に生まれてしまった以上は男として生きていくしかない。土で獣や鳥の形を作るのがどれほど上手でも、男にとってはなんの役にも立たないことなのだ。子供のころに焼いた動物や鳥の土型にしても、家を飾るほかはたいして役に立たなかつた。それらは形こそよく似てはいるが、もとはただの土くれなのだから、煮ても焼いても食べることができない。そんな役にも立たないものを作る暇があつたら、少しでも早く狩りや漁の技を覚えて、男にしか捕れない食べ物を村の人々にもたらずよう、努力しなければならぬ。それが男に生まれたヤムの、村人としての義務だった。

収穫の秋。

クリやナラ、クヌギ、トチの森は、地面がたくさんの実で埋め尽くされる。森はあまりにも広い。早く拾い集めなければ、それらの実は動物たちに食べられたり、腐ってしまったりする。男がすべき仕事と、女がすべき仕事。それぞれ役割分担されている中で、秋のクリ拾いとドングリ拾いだけは男も女も区別なく、すべての村人が総出でかからなければならぬ仕事であった。

食べられる草やキノコ、葉草を野山で摘み、布を織るための麻やカラムシ、葛くずの蔓つる、籠を編むためのアケビの蔓を採ってくるのは女たちの仕事だ。だが収穫時期の限られるクリやドングリは量も桁違いに多く、拾い集めるのに村の女たちだけでは手が足りないため、男の手も借りなければならぬ。村の大人たちは皆、おのおの大きな籠を背負って森に入り、手分けしてクリやドングリを拾う。子供たちはめいめい父親や母親に従い、親を手伝う。

ヤムもまた幼いころから母に付き従って、クリ拾いやドングリ拾いを手伝ってきた。成年の儀式を経た今年からは母を離れ、ひとりで森を歩かなければならぬ。

日頃は村の男たちから蔑あはまれ、仕事の足を引く張ると言われては邪魔者扱いされているヤム

も、クリやドングリを拾うことにかけては引けを取らないはずだった。実を拾い集めるだけの、女のするようなその仕事はヤムの性にも合っている。現に昨日まで幾日か続いたクリ拾いでは、ヤムの籠の中身は父や母の籠よりも多いくらいだった。

クリ林は村のすぐ外に広がっているから、それほど長い距離を歩き回ることもない。ドングリ拾いとなると、村から離れたナラの森やトチの森まで行き来しなければならなかった。森は深く、大人でも道に迷うことがある。

ヤムにとって、ドングリの森は親しい場所だった。森をよく知る母について歩きながら、去年までドングリ拾いを手伝ってきたのだから、迷う気がしない。

それでも家族は道に迷わないよう、互いに声を掛け合いながら森を移動する。父や母はもちろん、ヤムより五年早く成年の儀式を迎えた兄のタロも、弟同様ひとりで森を移動しながらドングリを拾い集める。

家族の中で、最も多くクリやドングリを集めるのはこの兄だ。弟と違って体が大きくて丈夫なタロは、日頃からヤムを目の敵のようにして、力の弱いことを責める。

「おまえはできそこないだ。女に生まれるはずだったのを、母さんが間違えて、男に生んでしまったんだ。おまえに男の仕事は無理なんだよ」

サケ漁や材木運びでヤムが失敗するたび、タロはそう言って弟をなじった。言われても言い

返せない自分が悔しかった。

いつか兄を見返してやりたい。

そう思っても、力が弱いことはどうしようもなかった。食べても食べても体は大きくならず、背が伸びるのも止まってしまったようだ。腕や胸には肉がつかず、大柄なタロと並ぶのが恥ずかしいほどにがりがりに痩せていた。

クリ拾いやドングリ拾いは、そんなヤムにも兄に勝てるかもしれない。ただひとつの仕事だ。体の大きいタロは力こそ強いが、小柄なヤムほど身軽ではない。笹の藪をかき分けながら森の中を素早く移動することにかけては、ヤムも自信がある。それだけたくさんのドングリを拾うこともできるはずだった。

収量の多さでタロに勝ち、家族で一番となること。あわよくば村一番の収穫物を背負って帰り、皆に褒め称えられること。

それがヤムの夢だった。

いや、けつして夢ではない。限りなく現実に近い、確固たる目標だ。去年までその機会さえ与えられなかったが、今年は違う。

タロに勝ち、村の英雄となる。それはすぐ手の届くところにあった。

兄や、村の男たちの鼻を明かしてやりたい。

その一念のもとにあの日、ヤムは父や母やタロに付き従い、夜明けとともに村を出発した。向かう先は「ムササビの森」だ。狩りの場でもあるその森は、トチやナラ、クヌギの林が広がり、ドングリの宝庫だった。

すでに収穫を済ませていたクリの林を抜け、沢沿いの道を進むと、しだいに藪が深くなってくる。灌木や茨、笹の葉が道を狭めている。道とは称していても、獣道との区別はほとんどつかない。狩りのときにも行き来する道だから、そこだけ下草にわずかな隙間がある。先頭を歩く父は、行く手を遮る灌木の枝を石斧で刈り払いながら進んだ。歩きながらもヤムは地面に目を凝らし、ドングリを見つけるたび背中の籠に入れていく。

やがて少し開けた場所に出た。そこはヤムにもおなじみの場所だ。トチの大木が大きく枝を張り、その付近だけ下草が刈り払われていて、ちよつとした広場のようになっている。

大木の木蔭で足を止め、父がヤムたちに向き直った。

「いいか、ここからは一人ずつ手分けをしてドングリ拾いをする。今年からはヤムも一人だ。だが、あまり遠くへ行つてはいけない。皆は声を掛け合いながら、森の中へ散らばる。めいめい、その声が聞こえる中で動き回るように。道がわからなくなったら、声のする方へすぐに戻れ。日が傾く前には、森を出なければならぬ。おれが『集合』の号令をかけるから、その声が聞こえたら、皆は声のする方に向かって集まるように」

ヤムが大きな声で「はい」と答えたので、タロはじろりと睨んできた。クリ拾いでは勝負がつかなかったせいか、兄もこの日は弟に負けられないと意気込んでいるようだ。つた。

「それでは作業開始だ」

父の号令とともに、タロは日の出る方角へと藪の中に消えていった。ヤムが日の没する方角に向かいかけたところで、母に呼び止められた。

「ヤム、あんまり無理をしないでね」

「母さんは心配しなくてもいいよ。おれはもう、一人前の大人だ。きつと、兄さんたちよりたくさんのドングリを集めてみせるよ」

「私も父さんに負けないくらい大きな声をあげるから、ヤムは私の声が聞こえなくなるような遠くまで行っちゃいけないよ」

「大丈夫だって」

まだ心配そうな母を残し、ヤムは灌木の藪に踏み込んだ。

それからは無我夢中だった。ドングリは、ほとんど無数とっていきくらいに落ちていく。丸いクヌギの実もある。クリに似た形のトチの実もある。細長いコナラの実もある。それらを見つけたい片っ端から拾い集め、次々と背中の籠に放り込んでいく。

時間が経つのも忘れていた。

いつの間にか背中の籠はずしりと重くなっている。ヤムにも背負いやすいようにと、母は小さな籠を編んでくれたのだったが、この調子でドングリを集めていたら、いまに籠から実が溢れてしまうのではないか。そんな心配をするほどに収穫作業は順調だった。

不意にヤムは、言いようのない不安に襲われた。森が、妙に静かなのだ。

いつの間にか、父や母の声が聞こえなくなっている。姿は見えなくても、さっきまでは藪の向こうから、「おーい」「ほーい」「ほほーい」などと呼び交わす声を耳にしていた。父や母、兄では、ひとりひとり叫び声が違う。それらの声にヤムもときどき応えて、「やーい」と返していたのだ。どの声からも遠ざかったことに気づかず、夢中でドングリ拾いを続けていたのだ。ヤムは立ち止まり、目をつぶって耳を澄ました。父や母の声はおるか、夕口の声も聞こえない。あまり聞き慣れないような鳥の鳴き声が、さっきから頻りに響いているばかりだ。

ここはどこだろう。

ヤムは森を見上げてみた。頭上にはトチの木々が枝を広げ、色づいた葉を透かして木洩れ日も射し込んでいる。

一瞬、方角がわからなくなった。

集合場所の方角を、自分では把握しているつもりだったが、わずかに傾きかけた日の射す向きは、ヤムが思っていた方角から、だいぶずれている。自分では日が没する方角に向けて進んで

いたつもりだったのに、傾き始めた日が射し込んでくるのはその反対だった。

この広い森で迷ってしまったら、日が暮れる前に村へ帰ることなど到底不可能だ。森で一夜を明かすことになる。暖かい家と違って、夜の森はさぞ寒いことだろう。火を熾おこす道具などヤムは持っていない。

がむしゃらに藪を突っ切りたくなる衝動をこらえ、その場に踏みとどまった。

落ち着け、落ち着け。

自分にそう言い聞かせながら木蔭に腰をおろした。とりあえず空腹を満たすために、イグサの袋に入れて持ってきた焼き栗を食べる。ヒョウタンの水を飲んだら、少しは気分が落ち着くような気がした。

休んでいる間もずっと耳を澄ましていたが、聞こえるのは鳥の声ばかりで、相変わらず父の声も母の声も、兄の声も聞こえない。日はまだ高いように見えても、このまま見当はずれの方角へ歩いていけば、父や母からますます遠ざかってしまうのは間違いないかった。

ヤムは必死に頭をめぐらせた。日の没する方角に向けて歩いてきたのだから、元の場所へ戻るには、日の出る方角へ歩けばいい。簡単なことだ。

だが引き返そうとして回れ右をすると、梢こすえを透かした日が目に入る。ということは、引き返そうとすればするほど、元の場所から遠ざかることになるのではないか。

引き返せばいいのか。それともまっすぐ進めばいいのか。

ヤムの頭は混乱した。

どの方向を向いても、目に入るのと同じような森の風景だ。ただ日の位置だけが、方角を示している。

こうなったら、目を信じるしかない。

ヤムは立ち上がり、日の射し込む方角に背を向けて藪を泳ぎ始めた。

道も何もない。行く手には背丈を越えるほどの灌木や笹が立ち塞がっている。もはやドンダリ拾いどころではなかった。今はただ父や母の声が届くところまで戻ること頭がいつばいだった。

ひよっとしたら今ごろは、父の「集合！」という声が掛かっているのかもしれない。いくら呼んでも戻ってこないヤムを案じて、父や母が捜し始めているかもしれない。

そう思うとじっとしてはいられなかった。

焦れば焦るほど、手足は思うように動かなくなる。灌木の枝はたわみ、頑固な力でヤムを押し返す。イバラの棘は衣にからみつき、蔓草が足に巻き付いてくる。

心は今すぐ父母のところへ飛んでいきたいのに、体はいつまでも藪から抜け出せない。兄より身軽だと思っていた自分の体が、今はすっかり疲れきり、手足を縛られたように重かった。

拾ったドングリを詰め込んだ背中の籠もずしりと重く、紐が肩に食い込んでいる。灌木の枝が籠に引っかかり、それでよけいに前へ進めないようだった。いつそ籠を捨ててしまいたかったが、こればかりは何があつても手放すまいと思う。藪を漕ぐのに予想以上の力が要るのだという現実を、ヤムは思い知らされた。

不意にヤムは耐えがたい喉の渴きを覚えた。それと同時に、思ったよりも近いところから水の流れる音が耳に入ってきた。斜面を下った先に沢があるのだ。

転げ落ちるようにして急な斜面を下ると、ヤムは背負っていた籠をそこに下ろし、手のひらで沢水をすくって飲んだ。

喉の渴きは癒されたが、再び籠を背負って立ち上がるにも足腰に力が入らない。籠が倍も重くなったように感じられる。水をがぶ飲みしたことで疲れが余計に出てきたようでもあつた。もう少し休んでから動き出そう。

そう思つて沢のほとりに座り込んでいたのだつたが、ふと気がつくと、森はいつのまにか薄暗くなりかけていた。時間の感覚がおかしくなっている。まだ日が暮れるようなころでもないはずなのに、もうじき森は夜の闇に包まれるのだ。

ヤムが森で一夜を明かしたことはまだない。村の男たちの中には、遠くへ狩りに出かけるたび、幾日も森で野宿をする者がいる。ヤムも半人前ながら、村の男である以上はいつか彼らに

付き従い、野宿をしながら獲物を求めて森をさまようことになるだろう。そのときはもちろん、ひとりではない。経験豊かな男たちと行動を共にするのだから、森で夜を明かすのも怖くはないはずだった。

だが今は違う。夜の森を乗り切るのに必要な知恵も技も、まだ身に付けていないのだ。それは村の男たちと共に森で夜を明かして、初めて覚える種類のものだ。その機会を得ないまま、たったひとりで夜の森に放り出されようとしている。

夏の森ではない。秋は日が落ちると、急に冷えてくる。ヤムが身に付けていたのは、カラムシで編んだ上衣に、麻の下穿したはきだけだった。どちらも母が編んでくれた衣だ。冬は鹿の毛皮で作った厚い衣に身を包んで体温を保つが、雪の降らない季節に着ることはない。両足はシナノキの皮を編んで作った履物に包まれていて、その足先から早くも寒さが忍び寄ってくる。

ヤムは傍らの大きなトチの幹に身を寄せ、手足を縮めた。谷の方から冷たい風が吹いてくるせいも、震えが止まらなくなってきた。少しでも動いていた方が体も温まるとは思うのだが、疲れ果てた体は立ち上がるのもおつくうで、もう一步も歩けそうにない。

刻一刻と森が暗くなるにつれ、ヤムの意識は薄れていった。朝早くから歩き詰めだった疲れが眠気と化して、甘美な夢へとヤムを誘う。夢うつつに見たのは、ヤムの持ち帰ったドングリの山を見て、父や母、夕口の驚く顔だった。トチの木に寄りかかりながら、ヤムは危うい眠り

に落ちていった。

三

パチパチと、薪の爆ぜる音が耳元で聞こえている。

気がつくと、そこは森ではなく、家の中のようだった。暗い屋内に赤い炎だけがぼんやりと映り、火が揺れるのに合わせて、人らしき影もゆらりゆらりと蠢うごめいている。

ここは？

ヤムは慌てて起き上がろうとしたが、体に力が入らない。身は萱の枯葉に横たえられ、胴の上も枯葉で覆われていて、心地よい温かさに体が包まれていた。

「まだ起きちゃだめよ」

思いがけないほど近くで、女の声が出た。

声のする方へ首を向けると、若い女の顔が火影に浮かび上がった。頭の上に大きく結い上げた髪の毛を載せ、透かし彫りのある鹿角の櫛をその根元に挿している。薄暗くてよく見えないが、村では見かけない顔のようだ。

「ウバ、気がついたよ」

女が横を向き、誰かに呼びかけた。少し離れたところから嘸しゃがれ声が返ってくる。やがて女がその誰かから器を受け取り、ヤムの顔にそつと近づけた。頬に伝わる微かな熱とともに、食欲をそそる香りをヤムは嗅いだ。

「食べられる？ 熱いよ」

木の匙きがヤムの唇に当てられる。反射的に口を開くと、舌に何か熱いものが流れ込んできた。舌の上で転がすようにしてそれを冷まし、喉に流し込む。ドングリの粉を煮て作った粥のようなものだと思われるのに、しばらくかかった。

そうだ、ドングリだ。

思わずそう叫んでいたのだろう。

いや、体に力の入らないその叫びは弱々しく、ほとんど呟ささきにしか聞こえなかったに違いはない。女はヤムの口に耳を近づけ、「なに？」と訊きいた。ヤムはもう一度声を絞った。

ドングリを置いてきた。

どこに？

森に。

あなたが倒れていたところね。

倒れていた？

夜が明けたら私が取ってきてあげる。

場所は知っているのか？

私があるのを助けたのですもの。ここまであなたを背負ってきたのよ。知らないものですか、あなたが倒れていたあの場所を。

そんな会話を、女と交わしたような気がする。熱い粥で体が温まったらまた眠くなり、ヤムの意識はふたたび途絶えた。

次に目が覚めたときには、夜が明けていた。薄暗い屋内を照らしているのは、炉の中の火ばかりではない。入口の垂れ布が上げられ、外から光が射し込んできている。

体に力が入るようになったヤムは、首から下を覆っていた萱の枯葉を押しつけるようにして上半身を持ち上げた。

そこは、ヤムの家とあまり変わらないように見える家の中だった。円形に掘り下げられた床の周りを、何本かの柱や垂木で支えられた萱の屋根が覆い、屋外と隔てられている。床の中央に掘られた炉の中では柴の薪が煙を上げ、火種を保っている。開け放しの入口から外の冷気が流れ込み、ヤムは体を縮めた。屋内に女の姿はなかった。

「起きたかい」

不意に入口で影が差し、その影が唳れ声を放った。目を凝らすと、そこに立っていたのは、
恰幅かつぶくのいいひとりの老婆であった。

屋内に入ってきた老婆は外に顔を向け、肩をすくめるようにしてみせた。

「ランだったら今朝早く森に出かけたよ。止めるのも聞かないでね」

老婆は枝を一本取り、手早く薪をかき混ぜる。燻くすぶっていた火が再び燃え上がり、ヤムの頬に
熱気が伝わってきた。

「まったくあの子は、一度思い立つたら聞かないんだからね。昨日だってそうさ。見知らぬ若
者が谷で倒れているのを、夜明け前の夢で見たからって、もうじき日が暮れるついでに森
へ出て行ったんだよ。あんたを背負ったランが家に戻ったときには、日がすっかり暮れていた
よ」

「ひとつ訊いてもよろしいですか？」とヤムは、年長者に対する敬意を払った口調で尋ねた。

「ここはいつたい、どこでしょう？」

最初に気がついたときに見た女も、目の前の老婆も、ヤムには見覚えがなかった。少なくとも
も、サケの村の女たちではない。

「ここは、アユの村だよ」

老婆がぶつきらぼうに答えたその名には、聞き覚えがあった。

アユの村。

ヤムはまだ一度も訪れたことはないが、村の男たちの中には、アユの村と何度となく行き来した者もいる。アユの村とサケの村は隣どうしでも、大人が一日がかりで森を歩き通し、ようやくたどり着けるぐらいに離れている。ふたつの村の間には深い深い森が広がっており、雪に鎖とぎされる冬は互いに行き来するのも難しいという。

ヤムはもうひとつ思い出した。〈大いなる川〉へ〈小なる川〉が注ぐ地点より、〈小なる川〉をしばらく遡ったところにアユの村があるのだということ。

「ここがアユの村だということは、この近くに〈小なる川〉が流れているのですね」

「いかにも。この村は、〈小なる川〉の恵みを受けておる。村境に立てば、〈小なる川〉の流れがよく見えるでな」

「ぼくはサケの村から来ました。〈大いなる川〉の近くにある村でして」

ひとりでドングリ拾いをしていて、森の中で迷い、疲れて眠り込んでしまったらしいということ、ヤムは打ち明けた。

「ほう、サケの村の者とな。それはそれは遠くからはるばると、よくも生きてこの村までたどり着いたものだ」

その痩せた小さな体でな、とは言わなかったが、老婆は感心したようにヤムを眺め、笑みを

たたえながら頷うなずいている。ヤムもあらためて老婆を見た。よく見ると老婆は、サケの村ではあまり見慣れないような格好をしている。ドンダリのように丸く大きな眼はともかくとして、なかば白くなった髪はミミズクの耳に似た奇妙な形に結び上げられ、赤漆塗りの櫛を二本も髪に挿している。床に届くばかりの長い衣は藤色に染められ、そこから首を出している。肩から先を包む筒状の布は、鮮やかな赤い紐で袖口を結ばれていた。

目を引くのは、ヒスイの勾玉を何個も通した首飾りだ。サケの村にはこれだけの数の勾玉を首飾りにした女はいない。それを首に提げたのでは相当重いだらうに、老婆は平然としている。耳にはこれまた大きく重そうな黒い石の輪を、耳飾りにぶら下げている。

不意に屋内へ外の光が射し込み、入口の垂れ布を開けて誰かが中に入ってきた。
昨夜の女だ。

見覚えある大きな籠を背負っている。

「あら、起きたのね」
年はヤムとあまり変わらないように見えるが、彼女の顔にはすでに、成年を示す刺青が刻まれている。

入口に立った彼女は、女にしてはずいぶん背が高い。男のヤムよりも上背がありそうだ。身を包んでいるのはサケの村の女たちとも大差ない麻の一枚布で、やはり首だけを出し、腕も筒

状の布で包んでいる。老婆との違いと言えば、衣の裾が短く膝丈くらいまでしかない点だ。驚くほど長いその脚が、短い裾からすらりと伸びている。首飾りは老婆と比べると至って質素で、勾玉ではなく小さな貝殻をひとつだけ提げていた。耳飾りも小さな白い貝殻で、蔓を巻いた腕飾りとともに、いかにも若い女らしい。髪は昨夜見たのと同じ大きな玉の形に頭の上で結んでおり、鹿角の櫛で留めている。

「ご苦労だったね、ラン。もうすぐ朝餉あさげの支度ができるから」

炉のそばで細い枝に刺したドングリ粉のパンを焼きながら、老婆が女を労ねぎらった。

ランと呼ばれた女はわざわざヤムのそばに寄ってきて、すぐ脇に背中の籠を下ろした。中ほどまでドングリで埋まっている。森で迷ったときは沢水を飲んだあと、これを背負い直すことができなかったほど重く感じられたのだったが、ランはさして重そうでもない。

「これは、あなたが採ったドングリでしょ？」

「確かに。この籠は、母さんがアケビの蔓で編んでくれた籠だ。その籠に入っていたのだから、ぼくが採ったドングリに間違いない」

「よかった。昨日はあなたを助けるのに夢中で、籠のことまで気がつかなかったのよ」

「でも、よくわかったね。あんな森の奥深くだったのに、道に迷わなかったの？ 朝早く取りに行つて、もう戻ったなんて。君はよっぽど足が速いんだね」

それを聞いてランは笑った。

「森の奥深く？ まさか。村のすぐ近くよ。あなたを背負って、ここまで連れてこられたくらいなんだから」

よもやあの場所がアユの村のすぐ近くだったとは、ヤムは夢にも思わなかった。それよりも、女の背に負われて命を助けられたことを面と向かって告げられ、少しきまりが悪かった。

「助けてくれた君には感謝してるよ。でも、日が暮れるようなころだったのに、どうしてあんな場所を通りかかったの？ 君もドングリ拾いに行っていたのかい？」

「違うのよ。夢に見たの。夕暮れ時にあなたが村の近くの沢で、トチの木にもたれかかって倒れている夢」

それを聞いて、ヤムはさつき老婆が言っていたことを思い出した。

「夢に見たから、それで助けに来たっていうの？ ぼくが倒れている場所まで、夢が教えてくれるものなのかい？」

「そうよ。わたしにも、そんな不思議な力があるみたいなの」

言いかげながらランは、どんぐりパンを焼いている老婆の方をちらつと見た。

「ウバはね、この村のお告げ婆なの。わたし以上に不思議な力を持っていて、これから起きることがわかるのよ。だから村人たちはみんな、困ったことがあればウバに相談するの」

「へえ。すごい婆さんなんだね」

ヤムはあらためて老婆を見た。言われてみれば、ヒスイの勾玉を何個もぶら下げた首飾りや、黒光りする大きな耳飾りも、どこか神秘的な光を帯びているように見えてくる。

ランは誇らしげに続けた。

「わたしはね、ウバの血を引いてるのよ。ウバは、わたしにとってお祖母ばあちゃん。つまり、母さんの母さんなの」

村人たちは尊敬の念を込めて、お告げ婆のことを（ウバ）と呼ぶ。だから自分も皆にならつてそう呼ぶのだと、ランは言った。

「わたしはまだまだ修行が足りないから、今はまだ、これから起きることを夢でしか知ることができないの。わたしもウバみたいに長生きして、もつともつと修行を積んで、きつとウバみたいなお告げ婆になる。村の人たちの役に立ちたいの」

ランは声を一段落とした。

「わたしの母さんはわたしを産んだときに死んじゃったし、父さんも雪の森で狩りをしていて命を落としたの。それからずっと、ウバと二人で暮らしてる。でも、暮らしに困ることはないのよ。毎日の食べ物自分たちで採ってくるし、服だって自分で作るから。それに、村の男たちが鹿やウサギやアユを捕ったときは、うちに分け前を持って来てくれるの。家の修繕とか、

穴掘りとか、そういう仕事はみんな男の人たちがやってくれる。アユの村では、みんなが助け合って生きてるの」

どんぐりパンの焼ける香ばしい匂いがヤムの鼻をくすぐった。

「さあ、朝餉の時じゃ。焼きたてで熱いから、気をつけてお食べ」

ウバから手渡されたパンを受け取り、ヤムは空腹のあまりむしゃぶりつくようにそれを齧^かつた。ところどころに焦げ目のついたパンは程よい硬さで、しっかりとした歯ごたえがある。水で溶いたどんぐりの粉を、丁寧によく練っている証拠だった。

「これを飲むといいよ」

ランの差し出した椀を受け取ると、器の底で緑色の汁が湯気を上げていた。口に含んだとたん、強烈な苦味が口に広がった。

「あなたは体が弱っているんだから、苦くても我慢して飲むことね。これもウバの知恵よ」

七種類の葉草を混ぜて煎じた汁だから、よく効くという。パンの香ばしいおいしさに引き換え、舌が曲がるような葉湯を飲み干すのは大変だった。残しては悪いと思い、ヤムは吐き気をこらえて最後の一滴まで飲んだ。

外に出て雲見をしていたウバが戻り、険しい表情でいう。

「今日はこれから雨が降る。風も出てきた。嵐の前触れじゃ。あんた、今から村に帰りなさる

「おつもりか？」

「ええ、できれば」

「やめておいた方がええ。ここからサケの村までは、深い深い森の道を丸一日がかりで歩き通さねばならない。それも元氣な大人の男が夜明けとともに出発して、日が暮れる前によくたどり着くほどの道のりじゃ。今日は夜明けからだいぶ時が経っておる。それにあんたは、体が弱っておられるではないか。その体でサケの村まで帰るのは、まだまだ無理じゃ。しばらくはこの家で、ゆっくり体を休めるがよからう」

ウバの言葉に従い、ヤムは体が回復するまでアユの村にとどまることにした。

四

もうすぐ長い長い冬がやってくる。

雪に鎖され、炉に焚いた火を囲んで一日中家に閉じこもっていなければならぬ日々が。

冬になると人の背丈を越えるほどの雪が降り積り、家も雪に押しつぶされそうになる。森が雪で覆い尽くされてしまえば、村から村へと渡り歩くのは命がけだった。狩りのために男たちが雪の森へ入ることはあるものの、女や子供が森へ入ろうと思えば、春の雪解けを待たなければ

ばならない。まして病人であれば、死に行くようなものだ。

ヤムがアユの村に来てから十を越える日が経った。衰えていた体もすっかり元気を取り戻し、ヤムは元通り動けるようになった。

それでもすぐにサケの村へ帰ろうとしなかったのは、アユの村の居心地がよかつたからとしか言いようがない。ランやウバばかりではなく、村の人々は誰もが優しくかつた。

それにヤムは、アユの村に来てから自分の意外な才を見出した。村の男たちに教えられ、〈小なる川〉へのアユ釣りに加わつたときがそうだ。

アユを釣るための精巧な釣り針を、村の男たちはいくつも持つている。釣り糸を作るのは女たちの仕事だ。イラクサの茎から繊維をとり、丹念に丹念に縊より合わせる。ランやウバも、暇さえあれば釣り糸作りに励んでいる。

ヤムは釣り針作りに挑戦してみた。村の男から針の見本を借り、獣の骨を細かく削つていく。手先の器用なヤムが作つた釣り針は出来も上々で、村の男たちにも喜ばれた。

こうして出来上がった道具を持つて、男たちは〈小なる川〉へとアユ釣りに出かける。秋はアユが産卵のため川を下ってくる季節だ。サケ漁は苦手なヤムだったが、めいめいが浅瀬で釣り糸を垂れるアユ釣りにはそれほど力を必要としない。糸が切れないよう竿を巧みに操り、針にかかつたアユを釣り上げるのにはコツが要る。そのコツもヤムはすぐに覚え、次から次へと

大物を釣り上げていった。

こうしてアユの村にすっかり解け込んだヤムだったが、いつまでも村に居ることは許されなかった。サケの村では、あのドングリ拾いの日から行方知れずとなったヤムの身を、今でも案じていることだろう。とくに母は、身を切る思いでヤムの帰りを待ちわびているにちがいない。そうでなければ、もう死んでしまったものとして諦め、悲しみにくれているのかもしれない。

ヤムはサケの村の村人であつて、アユの村の者ではない。今はアユの村の人々もヤムを客人として温かくもてなしてくれているが、これがいつまでも続くはずがなかった。厳しい冬を迎えるころになつてもヤムがまだ村に居座るようなら、村人たちも、ランやウバでさえも、けつしていい顔はしないだろう。

そう考えると、雪が降らないうちにヤムは故郷の村へ向けて旅立つべきだった。今日こそは、明日こそはと思つているうちに、ついつい出立の日を遅らせていたのだ。

ヤムの足をアユの村へと引き止めようとするものが、もうひとつある。

それは、ランの存在だ。

ランには、初めて会ったときから特別な想いを抱いていた。サケの村の女たちは、男らしい逞しさに欠けるヤムをどこか蔑むような目で見る。彼女たちも他の男たちに対しては、畏怖と

尊敬の入り混じったような態度で接しているのだ。そのせいか、ヤムの方でも村の女たちには、どれほど美しい女であってもあまり魅力を感じなかった。

アユの村では、ヤムをそのような目で見る女はいない。中でもランは、まるで母のように、慈愛のこもった眼差しでヤムを見てくれる。ランと一緒にいると心が癒された。

ランと、離れたくない。

このままアユの村にとどまって、いつまでもいつまでも、ランと一緒に暮らしたい。その思いが日に日に募っていく。

ただひとつだけ、ヤムがランに対して気後れする部分がある。

ランはヤムより上背があり、村の女の誰よりも背が高かった。サケの村でも、ランより大きな女はいない。並んで立つと、男のヤムが女のランを見上げるような格好になる。

ランのすらりと伸びた長い手足や、女性らしい体の曲線も、ヤムが持っていないものだ。きゅっと縮まった腰のくびれ。

豊かに張り出した大きな尻。

ランは惚れ惚れとするほど美しい肉体の持ち主だ。それだけによけい、ヤムは男として、自分の体の貧弱さに引け目を感じていた。

それでもヤムは、ランへの想いを断ち切れない。サケの村に帰り、ランと離れ離れの暮らし

に戻るのかと思うと、とても我慢できない気がする。

ランもまた、そんなヤムの想いを受け入れてくれた。ランと一緒にいられるこの時間を名残惜しむようにして、一日、また一日と、ヤムは出立の日を延ばし続けた。

そんなある日の暮れ方。

村境に立ち、〈小なる川〉に向かって雲見をしていたウバが家に戻るなり、厳しい表情でヤムにこう告げた。

「二、三日うちには今年最初の雪が降る。降り出さぬうちに、そなたはサケの村へ帰るがよい。さもなければ雪に閉じ込められ、村へ帰れなくなる。幸い明日はまだ空も持ちこたえよう。サケの村への道を知る若者をひとり、道案内に付けてやるから、明日は夜明けとともに村を発つじゃ」

いつかはその日が来るとは覚悟していたが、いざ告げられてみると、ヤムは突き放されたような思いだった。

ウバにはこれから起こることを見通す不思議な力がある。そのウバが言うのだから、二、三日うちに雪が降るといふのは間違いないのだろう。ヤムはそのお告げに従うよりほかにない。

その夜はランもウバも言葉少なで、翌朝に迫ったヤム出立の支度に黙々と費やした。晩秋の

森で北風に吹かれれば、冬と変わらないほど体が冷やされる。旅装は万全にと、ウバは野ウサギの皮でこしらえた頑丈な履物や、鹿の皮を縫い合わせて作ったマントまで用意してくれた。あのドングリ拾いの日と比べても、季節は一段と冬に近づいている。本当に、いつ雪が降り出してもおかしくない夜の冷え込みだった。

翌朝は外がまだ暗いうちに起きて、早い朝餉のあと身支度を整え、トチの森から朝日が出るのと同時にヤムは村を出発した。

道案内として同行するのは、マキリという青年だ。彼はサケの村に何度か行き来したことがあると言い、森の道に精通していた。ヤムよりも頭ひとつ以上背が高く、腕も胸板もがっちりとした逞しい男だ。

村外れまで見送りに来てくれたランを、ヤムは振り返った。ヤムは遠目が利く。手を振るランの目に涙が光っているのを見て、胸に迫るものを覚えた。次の瞬間、ランのもとへと駆け寄っていた。

「泣かないでくれ、ラン。ぼくはきつと、帰ってくるから。ぼくが無事に生きているということ、母さんや村の人たちに知らせたら、必ずこの村に戻って、ランと一緒に暮らす。約束するよ。だからラン、それまで、待っていておくれ」

ランは涙をこらえながらもにっこりと笑い、頷いた。

それだけ告げるとヤムは、足を止めてこちらを見ているマキリのもとに駆け戻った。

冬枯れで歩きやすくなっているとはいへ、サケの村への道は長くて険しい。マキリは足が速く、ぐずぐずしていると置いていかれそうになる。彼がひとりで勝手に歩いていくものだから、ヤムはときどき走らされた。

昨日までは親切な村人のひとりだったのに、こうしてふたりきりになったとたん無愛想になり、ほとんど口もきかなくなつたマキリにヤムは戸惑つていた。日が高く昇るまでは、ただ黙々とマキリの背中を追つた。

急流の沢を巻くようにしながら歩いていくと、やがて石だらけの開けた場所に出た。ここで一休みしようというマキリの提案に、ヤムも足を止めて手ごろな石に腰を下ろした。

ふたりはしばらく黙つて瀬の音に耳を傾けていたが、やがてマキリがその沈黙を破つた。

「おまえ、ランを嫁にするのか？」

ヤムは、ハツと胸を衝かれた。ヤムを見るマキリの鋭い眼は、敵意に似た光を放っている。マキリもまた、ランに密かな想いを寄せるひとりだったことにヤムは気づいた。

それでもマキリは、ひとりの男としてヤムを見ている。サケの村の男たちや女たちとは違う目だ。そんな目で見られたことのないヤムは戸惑いつつも、マキリに親しみを覚えた。

ヤムは頷ぎ、マキリの目を見返した。

マキリはヤムから目を逸らし、瀬に視線を落としながら呟くように言った。

「ランを村から連れ去るのか」絞り出すような声だった。「お前はふたたび村へ来るといったランを花嫁にして、サケの村へと連れ去るために迎えに来るのか」

ひよつとするとマキリは、自分自身がランを嫁にしようとしていたのではないのかもしれない。ヤムはふとそんな気がした。幼なじみのランが、アユの村からいなくなる。そのことがマキリは寂しいのだ。

ランは村人たちから慕われている。誰からも好かれる朗らかな性格の持ち主で、おまけにとびきり美しく健康な若い女だった。ランは村の男たちにとって、女神にも等しい存在なのかもしれない。

そんなランを、隣村からやってきたヤムがサケの村に連れ去ろうとしている。

マキリにはそれが我慢ならないのだろう。

ヤムは首を横に振った。

自分にそんなつもりなど少しもない。ランをアユの村から奪おうなどとは。

ヤムに対してあんなに親切にしてくれたアユの村の人々を、悲しませたくはない。

「ぼくが村を出る」ヤムは声に力を込めた。「一度はサケの村に帰るが、ぼくは必ずアユの村に戻る。君たちさえよければ、ぼくをアユの村の仲間に加えてくれ。ぼくはランとウバの住む

家に入り、ランの婿として、一生懸命働く。ランのためにも、村のためにも。ぼくにできることだったら、何でもする」

マキリは驚いたような目をしてヤムを見た。

ほんとうに、いいのか？

口にせずとも、その目が語っていた。

いいとも。

ヤムは頷き、マキリの目を見返した。

ふたりはしばらく、目と目で語り合った。

サケの村が見えてきたのは、晩秋の短い日もそろそろ暮れようとするころだった。

村外れまで来て、マキリは足を止めた。

「おれはここで引き返す。さあ、ヤムは早く行って、父や母や村人たちに無事な姿を見せるんだ」

そう言つてマキリはヤムの背を押そうとする。ヤムは慌ててマキリを引き止めた。

「もう日が暮れる。夜の森を帰るのはやめた方がいい。ぼくが頼んでみるから、今夜はうちの村に泊まっていてくれ」

だがマキリは首を振る。

「この上に岩陰がある。そこに住み着いている男を知っているか？」

「ああ。呪術師とか言ったな」

「おれはその呪術師を知っている。今夜は彼のところに泊めてもらおう」

サケの村を見下ろす山の上に、村人たちが〈聖なる岩〉と呼ぶ岩陰があった。村の長老が生まれるはるか昔、サケの村もアユの村もなかつた遠い遠い大昔に、〈古代人〉がその岩陰に住んでいたのだと伝えられていた。

その〈聖なる岩〉にひとりの旅人が住み着いたのは、一年ほど前のことだ。男は村人とあまり交わらず、食物も自分で採って暮らしているようだった。ときどき山を下りてきては、鋭く切れる〈黒石〉や塩と引き換えに、サケや鹿の肉などを持ち帰る。村に病人が出ると、誰かが山まで男を呼びに行った。この病人は生きるか死ぬかを占い、生きるべき者には命の力を取り戻すよう、呪文を唱える。いつしか男は、〈呪術師〉と呼ばれるようになった。

「呪術師はどこから来たか、知っているか？」

ヤムの問いに、マキリは一度頷いてから微かに首を傾げた。

「彼は多くを語らない。〈大いなる川〉を遡ったずっと先、はるか彼方の村で生まれたのは確かだ。飢饉があつて村人は死に絶え、彼ひとりが生き残つた。それからずっと、旅を

していると言っていた。おれが知っているのは、それだけだ」
そう言い残し、日の落ちかかった森へとマキリは引き返して行った。

五

村に帰ったヤムを見て、人々の驚きようと言ったらなかった。幾日ものあいだ行方知れずとなっていたのだから、ヤムはもう生きていないものと皆は諦めていたようであった。

家では父から咎とがを蒙こうむった。お前のせいで母が臥ふせっていると告げられ、ヤムは殴られたような衝撃を受けた。

炉のそばに横たわり、萱の布団になかば埋もれたようにしている母を見て、ヤムは声を失った。母は見る影もないほど痩せ衰えていた。

「あの日、ヤムが帰って来なかったものだから、母さんは朝餉も夕餉も喉を通らなくなったのだ」兄のタロが憎しみのこもった声でヤムをなじる。「今では、自分の力で起き上がることもできないほど弱ってしまった」

ヤムは拳を握りしめながら、母のそばに屈み込んだ。

「母さん、心配かけてごめんよ。もっと早く帰って来ればよかったのに。母さんをこんなにな

るまで待たせてしまつて」

母はそれでも、息子の帰宅を心から喜んでゐるようだった。声も出せずにいるが、その目もとからはひと筋の涙が流れた。

これから迎える長い冬の支度をするため、次の日はヤムもいろいろな仕事に駆りだされた。

もう二、三日うちには雪が降るといふ、アユの村で聞いたウバの言葉をヤムが長老に伝え、長老が村の男たちに号令を掛けたのだ。

降り積る雪に備えて家を修繕し、丈夫な板で家々の周りを囲う。村の広場には新たな穴を掘つて、秋に収穫したドングリやクリ、クルミの実などを次々と埋め込んでいく。

ヤムの苦手な力仕事ばかりだったが、少しでも村の役に立とうとがんばった。

自分はいずれ、この村を出る。アユの村でランの婿となり、アユの村に骨を埋める。

その決意は動かない。

母と離れるのはつらいが、ランがアユの村を出るよりも、自分がサケの村を出た方がいいに決まつている。どうせ自分は村の厄介者だ。自分がいなくなつても、村では誰も困らない。

そんなことを考えながら、村への最後の御奉仕というつもりでヤムは汗を流した。

ウバの予言どおり、ヤムが村に帰った二日後から雪が降り出した。

翌朝ヤムが起きたときには、村はすっかり雪化粧していた。今のうちなら森の雪もそれほど深くはない。雪さえ降り止めば、ふたたびアユの村へと歩くこともできないことはないだろう。ヤムは空が晴れるのを待った。

だが次の日も、そのまた次の日も雪は降り続いた。初雪からこれだけ雪が続く年も珍しい。三日経つうちには森もすっかり雪で埋め尽くされてしまった。

アユの村へと通じる道は、一度歩いて覚えたつもりだったが、雪に覆われてしまえば心許ない。ランのもとに帰るのは、根雪が消える春まで待つのが安全だった。

心は一日も早くランのところへ飛んでいきたいのに、ふたつの村の間を冷たい雪の森が隔ててしまっている。雪に鎖される長い冬を思い、ヤムは深いため息をついた。

ヤムが村へ帰ってからも、母はなかなか元気にならなかった。食事は少しずつでも摂るようになっていたが、まだまだ起き上がれそうにない。それだけ母の体は衰えてしまっているのだ。急に老け込んだような母を見るのが、ヤムはつらかった。

呪術師を呼びに行くと言いつつ、父は険しい顔で首を振った。

「この雪の中を山の上まで行くのは危うい。雪解けを待った方がいい」

春まで待っていては、母の命が持たない——その言葉をヤムは飲み込んだ。

「おれが行ってくる」兄のタロが胸をたたいた。「雪の森は何度も狩りで歩いたし、（聖なる岩）の場所も知っている」

タロもまた、母の回復を祈る息子のひとりだった。

その日のうちにタロが連れ帰った呪術師は、近くで見ると想像以上に大きな男だった。

鋼のような髪には白いものが混じり、顔中を覆う髭も半分が白い。岩に似た顔面には亀裂のような皺しわが刻まれ、亀裂のうちの二つが眼だった。呪術師は熊の毛皮のマントを脱ぐと、母の寝ている炉のそばに近寄った。

固唾を飲んで見守るヤムたちに、呪術師は力強く告げた。

「この者は、まだ死ぬべきではない」

呪術師は母の寝ている両脇にそれぞれ枯葉のついた枝を立て、皮袋から木製の大きな仮面を取り出した。心の臓の形をした仮面には、目出しの孔が二つ開いている。呪術師はその仮面をかぶり、何やら呪文のようなものを唱え出した。祈祷が終わるまでの間、ヤムたちは身じろぎもせずに呪術師を見守った。

呪文が終わると、父は謝礼として、呪術師に鹿の皮の下穿きを渡した。獣の皮で作った衣は貴重品だ。過分の謝礼とも思えるが、母が助かるという望みを得たことで、父は父なりの謝意を示したのだった。父もまた、ヤムや兄に負けないくらい母を愛していた。

皮の下穿きを受け取った呪術師が、家を出て行くこうとして、ふと足を止めた。

「これは、誰が作ったのだ？」

呪術師が手にしたのは、入口の横に飾つてある小さなミミズクの像であった。

「これがまだ子供のころ、手遊びで土をこねて作り、母親が器とともに焼いたものにございます。未熟な玩具ではございますが、捨てるのも惜しいとこれの母親が申すもので、こうして家に飾つているのでございます」

父が「これ」と指差したヤムの顔を、呪術師は軽い驚きの表情で見下ろした。

「そなたには才がある。いずれ私が、土偶作りを伝授することになるう」

そんな言葉を残し、呪術師は立ち去った。

祈禱の甲斐があつたのかどうか、それとも、呪術師が言い置いたとおりの葉草を村人から調達し、それを煎じて飲ませたのが効いたのか、母の体は回復の兆しを見せ始めた。

雪が深くなると、ヤムも父や兄とともに日に何度も家の外へ出て、家屋が雪で押しつぶされないよう、大きな木ベラを使って雪かきをしなければならぬ。その頃には母も起き上がり、朝餉や夕餉の支度をしたりするようになった。雪が積もらないうちに集めて家の隅に束ねておいたシナノキの皮を使い、足を覆う履物を編み始めた母を見る頃には、誰もが奇跡の回復を信

じて疑わなかった。

父や兄は事あるごとに呪術師への感謝を口にする。

彼がヤムを弟子にしたがっているのなら、喜んで送り出そうぞ。

そう言つて父と兄は笑い合つた。それを聞きながら、母だけは笑わなかつた。

父と兄の戯言が現実となつたのは、長い冬も過ぎて雪も消えかかり、あらわ顯れた土の上にフキの花芽が顔を出す頃だつた。

久しぶりに山を下りて来た呪術師は、家にまっすぐやつて来ると、屋内を見回し、ヤムを見つけてこう告げた。

「そなたを迎えに来た。約束の技を伝授するゆえ、是非に私と一緒に来てもらいたい」

ヤムはすぐに鹿皮の上衣を着せられ、呪術師とともに送り出された。一人前の男としての労働力にはあまり期待されていないヤムだけに、「幾日も帰れまいぞ」といつた呪術師の言葉にも、父や兄は引き止めようとしない。ふたりは、一人分の食ふちい扶持が減つた程度にしか思っていない様子でもあつた。

呪術師について雪の残る山道を登り、ヤムは初めて〈聖なる岩〉の岩陰にやつて来た。

「心せよ。落ちれば命はない」

壁のようにそそり立つ岩の傍らに、人ひとりがようやく通れるほどの細い道が続いている。ほとんど岩に張り付くようにして登って行くと、その先に岩の裂け目が広がっていた。呪術師に続いて裂け目から下へ降りて行くと、中は思ったよりも広かった。人が優に十人以上は入るだけの広さがある。底には土が敷き詰めてあり、その中央には炉も掘られていた。呪術師が火打石を取り出して火を熾すと、薪から煙が勢いよく上がり、ほどなくして暖気が岩陰に満ちてきた。

この岩陰の住居には、さまざまなものが置いてある。煮炊き用の土器もあり、葉草らしき干草の束もあり、石皿、石斧、磨石、たたきいし 敲石といった加工石のほか、衣とも呼べないような獣の皮草や木の皮らしき繊維の束、山のように積まれた柴の薪もある。

とりわけヤムの目を引いたのは、さまざまな形の土偶の数々だ。人の形をした土偶もあり、獣の形をした土偶もあり、鳥や魚の形をした土偶もある。中には何を象ったものか、ヤムにはわからない奇妙な形の土偶もあった。

土偶を興味深げに眺めているヤムに向かって、呪術師が言う。

「そなたも作ってみたいか。ここにあるものはすべて、私が試みに作ったものばかりだ。私は長い間旅をして回って、あちこちの村で土偶を見てきた。見よう見まねで作ったものでな。形ばかり似せても、神が宿らぬのでは使い物にならないのだ」

呪術師はそう謙遜したが、ヤムの目にはどの土偶も見事な出来に見えた。

鹿の神。ウサギの神。狐の神。熊の神。キジの神。カラスの神。梟ふくろうの神。サケの神。

そして、数多くの女神たち。

「よき土偶には神が宿るが、失敗作はただの土くれだ。神が宿った土偶には、同時に不思議な力も宿る。人の力では左右できないもろもろの事柄を、神々は司っておられるのだ」

白髭に覆われた岩のような顔から降ってくる声は厳おごかだった。ヤムは、目の前の呪術師にこそ今、神が宿っているように思えた。

呪術師は続ける。

「神が宿りたもう土偶は、いずれ壊される運命にある。慈愛に満ちた神々は、人に代わって様々な災厄を引き受けてくださるのだ。自らの身体と引き換えに人々を災いから救い、稔りと恵みをもたらしてくださる。だが神が宿るほどの土偶は、誰にでも作れるものではない」

呪術師は言葉を止め、ヤムの目をじっと見つめた。それからおもむろに口を開いた。

「そなたにはできる。神の宿りたもう土偶を、その手で作るのだ」

この手で？

ヤムは思わず両の掌を目の前にかざし、穴の開くほど見つめた。

「人にはその人それぞれの、才というものがある。狩りに優れた者もいれば、漁に秀でた者も

いる。家作りをよくする者。土器作りの巧みな者。衣を縫うのが誰よりも上手な者。これから起こることを知り、村人たちに告げるべき特別の才を持つ者」

ヤムはウバの顔を思い浮かべた。そのウバの血を引き、同じ才を受け継いでいるらしいランの輝くような微笑も。

「私には、いかなる才があつたのだろうか。こうして呪術を行い、村人から幾ばくかの施しを受けて、辛き命をつないでおる。人の命を見極め、永らえる者にはその魂が飛び去らぬよう、心ばかりの文を唱える。それが私の才だとすれば、それでよかろう。私には、人の運命を左右するほどの力などない。私は神ではない。私はただ、神のご意向を知り、それを人々に伝えるだけだ。祈りの文にはどういふわけか、神が見放さなかつた者を力づける効能もあるらしい。それもまた私の才だとすれば、これほどの幸いはない」

呪術師には、母の命を救つてくれた大恩人という思いがあつた。だが話を聞いてみれば、すべては神の思し召しということになる。ヤムの頭は混乱しかけた。

「その私にも力の及ばぬことがある。そこから先は神の領域だ。神のご意向を左右することなど、人にはとてもできまいが……」

呪術師は土偶のひとつを手を取った。

「神の偉大なる力に、おすがりすることはできないでもない。ただしそのためには、神の宿り

たもう土偶を作らねばならないが」

その才を、家に飾つてあつたミミズクの像ひとつを見ただけで呪術師は見破つたというのだろうか。あれはヤムが生まれてから、十の冬を越すか越さないかの幼いうちに作つたものにならぬというのに。

「ぼくにできませんようか？ 儀式に使われるような土偶など、一度も作つたことがないので
よ」

「これは経験ではない。何度作つたとて、神の宿る土偶を作れぬ者は作れぬのだ。才に恵まれた者だけが、作り得る。そなたはただ、学べばいい。私が作つた土偶には神など宿つてもいいが、形ばかりは真似てある。形を学び、あとはそなたが工夫してみるのがよい」

六

ヤムはその日から幾日も岩陰で寝起きし、時には呪術師の仕事を手伝いながら、土偶作りに励んだ。

呪術師はどこからか赤茶けた土の塊を岩陰の住居に運んでくる。その土に水を加えてよく練るのがまた一仕事だ。練り上げた土を自由自在に操り、思い通りの形にすることができるよう

になるまで、幾日も費やした。

慣れてきたところでいいよ、呪術師の作った土偶を手本にその形を真似てみた。

「形ばかり整えても意味がない。その形のもととなったものの命を、思い浮かべるのだ。土の塊に命を吹き込むようにな。形など、少しぐらい崩れても構わぬ。命にこそ、神が宿るのだ。命あるものが、神になるのだ」

呪術師の言うことは難しくてよくわからないところもあったが、ヤムはヤムなりにその言葉を理解しようとし、理解した限りを土にぶつけていった。

なかなか思い通りの形が作れない。獣や鳥、魚の形ならまだよかった。ヤムは、女神の形を作るのがどうも苦手だった。目に見えない女神の姿を思い浮かべるのが難しいからだろうか。手本の土偶を、ただ形だけ真似たような作が並び、呪術師は顔を曇らせる。

「あらゆる神々の中でも、女神は最高の存在だ。土偶に女神が宿れば、大きな力を手に入れる。女神は大きな存在だから、引き受けてくださる災厄も、引き換えにもたらししてくれる恵みも、それだけ大きい」

ヤムは女神の土偶だけ幾日も幾日も作らされた。土をこねて女神の形を作っては壊し、また一からやり直す。比較的好くできたものは壊さずに残しておくが、呪術師は満足していない様子だった。

呪術師のところにはときどき村人がやってくる。そのたびに彼は出かけていき、日が暮れるような頃に帰った。ヤムは同行せず、留守をしながらひたすら土偶作りに励んだ。

ヤムが岩陰に来てから数え切れないほどの日が昇り、日が沈んだ。

こうしている間にもヤムは、一日たりともランとの約束を忘れたことはない。土をこねながら、女神の像を象りながら、出来の悪い像を壊して土に返しながら、幾度となくランの微笑や、美しいあの肢体を目に浮かべた。

いまもランは、ヤムが来るのを待っているにちがいない。季節はいつの間にか春を過ぎ、郭公こうの鳴く夏を迎えていた。ヤムがアユの村を立ち去ってから、どれだけの日が昇り、日が沈んだか知れない。

ヤムも二、三日に一度は呪術師を手伝い、岩陰を出ては山へ食用の菜を摘みにいく。

アユの村の人々は、今ごろどうしているのだろう。ランやウバもまた、同じようにワラビやゼンマイ、フキを摘んでいるのかもしれない。その身に変わりはないだろうか。

そう思うと、この岩陰からアユの村まで鳥のように飛んで行きたくなる。いつまでもこの薄暗い岩陰で、毎日土ばかりこねている我が身に焦りが募ってくる。

「そろそろ形になってきたようだ。今日は器を焼くついでに、土偶も焼いてみよう」

夏も終わりを迎えるころ、呪術師にそう告げられ、ヤムは出来のいい土偶を持って岩陰を出た。片手に持った土偶を落とさないよう、慎重に岩を下りて行く。

岩陰を出てしばらく行くと、比較的平らな岩場に出る。岩と岩との間にほどよい窪みがあった。呪術師はそこに薪を敷き、自ら形作った土器を薪の脇に置いた。ヤムも土偶をその横に置く。岩陰との間を何度か行き来して、獣や鳥の像も含め、いくつかの土偶を岩場まで運ぶ。並べ終わったところで呪術師が火を熾し、薪が盛大に煙を上げ始めた。

焼き上がるまで火を絶やさぬよう、焚き火に付きつきりでないかなければならない。ヤムも呪術師に付き添っていたが、煙が目には染み、何度も嘔吐むせて咳が止まらなくなった。

日が暮れる前に焼き上がった土器と土偶は、まだ熱いので手で触れることができない。一晩かけてそれらを冷ますため、ヤムたちは岩陰の住居に戻った。

翌朝早く、ヤムは呪術師に従って岩場へ下りた。焼き上がった土偶を手にしたときは、何も言えない気分だった。

これに神は宿っているのか？

手本に似せて形を作り、ヤムなりに工夫して、命を吹き込むように細部を刻んだ女神像だ。

ヤムが子供のころ、土の床や地面に枝先で獣や鳥の形を描いたことが少しは役に立った。土をこねて作った女神の形に、へらを使って絵を描くように細い線を入れる。線は、髪の毛や髪飾

り、目、鼻、口、衣、首飾り、刺青などを表す。ミミズクの耳に似た髪型は、ウバをイメージした。二つの大きな丸い目を見てみると、自分で作ったものながら、吸い込まれそうな気がしてくる。不思議な術にでもかかった気分になり、あわてて首を振った。

「この土偶には、神が宿っておる」

呪術師の言葉は簡単だったが、最大の褒め言葉でもあった。来る日も来る日も土をこね、女神像を作っては壊し作っては壊ししていた日々を経て、いつのまにかヤムは何かを掴んでいたのだ。

「もう村に帰ってもよかるう。ここで身につけた技は、いつか必ず役に立つ。そなたははずれ、村を救うことになるのだ」

焼き上がった土偶を携えて村へ帰ったヤムを、誰よりも温かく迎えてくれたのはやはり母だった。

「まあ！ みごとな土偶。これを、ヤムが本当に作ったのかい？」

「作ったよ。何度も何度も作り直してね。やっと掴んだんだ」

「これだけの土偶を作れる人は村にいないよ。私だって、作れやしない。ヤムにはやつぱり才があったんだねえ」

いつの日かこれが必要になる日のために、土偶は家の中へ大切に飾られた。

誰よりも息子の帰宅を喜んでくれたのに、その母をふたたび悲しませるような言葉を告げなければならぬ。そのことが、ヤムは何よりも辛かった。

アユの村から帰ったあとも、母の健康を慮おもつて、ヤムはランへの想いを母に話していなかった。ただ「親切な村人に助けられ、体が元のとおり動けるようになるまでその家の世話になった」とだけ説明していた。

ヤムを助けたのが若い女であること、その女への想いが断ちがたいこと、いずれアユの村へ戻り、彼女と一緒に暮らすと約束したこと。ヤムが順を追って話すうちにも、母の目は涙ぐみ、今度こそ本当に息子と別れる日が近いことに打ちのめされている様子だった。話しながらヤムも胸が塞ふさがる思いだった。

「アユの村に行っても、母さんのことはきつと忘れないよ。それに、朝早く村を出れば日が暮れるまでにここへ着くんだから、ときどきは母さんに会いに来るよ。もう二度と会えないわけじゃない」

「そうだねえ。ヤムにとっては、その方が幸せになれるかもしれないねえ。だから、祝つてあげなくちゃ」

母はそう言つて涙^{はな}をすすりあげた。

それから三度目の日が昇つた日の明け方、ヤムはサケの村を発つた。父や母、兄、村人たちに見送られ、皮のマントに身を包んで、ヤムは森へと足を踏み入れた。

アユの村に通じる道、マキリに案内されて歩き通したあの道をヤムは忘れていない。この道を逆にたどり、またアユの村へ帰るのだからと、その道筋を頭に刻み付けていた。

森はそろそろ秋の装いだった。あと少しすればクリやドングリで森は埋め尽くされる。ランと出会つてから、もうすぐ一年が経つのだ。あつという間だったような気もするし、長い月日が経つたような気もする。

ランは今ごろ、どうしているだろう。

不意にヤムは、不安に襲われた。

ヤムはあまりにも長くランと離れすぎた。今ごろランは、ヤムのことなど忘れてしまつてい
るのではないか。

マキリがランを嫁にしているのかもしれない、とも思った。マキリの方が男としてはずっと遅しく、ランより上背もある。それに、ランとマキリは、幼いころから同じ村で育ち、親しい間柄だったのだ。

ヤムに挑みかかるようだったマキリの鋭い眼を、ヤムは思い出さないわけにはいかない。ヤムの足は自然と速まった。

頭に刻み込んでいた道とはいえ、ひとりで日が暮れるまでに無事アユの村までたどり着けるかどうか、ほんとうのところは自信がなかった。あのドングリ拾いの日の、悪夢のような記憶がよみがえる。

行けども行けども道なき道の藪が続き、父の声も母の声も聞こえない。たったひとりで、この果てしない森に取り残され、日はどんどん暮れていく。足は棒切れのように疲れ果てて自分の足でないように動かず、体の芯からぞくぞくするような寒気が忍び寄る——

あんな思いは、二度と味わいたくない。
森が深まり、聞き慣れない鳥の声を耳にするたび、ヤムは緩めかけた足を速めた。

ようやくアユの村が見えてきたのは、傾いた日がクリの梢にまだ見え隠れしていたころだった。村の向こうでは、〈小なる川〉の流れが日に輝き、まるでヒスイの玉を散らしたようにきらりと瞬いている。

村に入ってまず目に入ったのは、マキリの姿だった。家の前で干しアユを取り込んでいる最中だったが、ヤムに気がつくくと手を止め、目を見開いた。

「ヤム！ ヤムじゃないか！」

駆け寄ってきたマキリは、いきなりヤムの肩をたたいて、少々手荒い歓迎の意を示した。まるで親しい友と再会したかのように、マキリは笑みで顔をくしゃくしゃにしている。

「さあ来い。ランが待ちくたびれている」

懐かしい家の前まで来ると、マキリはもったいぶったようにヤムを制した。

「ちよっとここで待っていてくれ。そうだな、こっちの物陰にでも隠れているよ。おれが合図するまで、出てくるなよ」

小声でヤムに指図してから、マキリは家の垂れ布を上げて中に入った。ヤムはマキリに言われたとおり、薪を積んでいる陰に身を潜める。

ほどなくして、家からランが飛び出してきた。不思議そうにあたりをきよろきよろと見回している。マキリが右手を大きく上げ、こちらに向かって合図を送った。

ヤムはランの前へと飛び出した。

ランは短く叫びを上げ、一瞬後ずさったが、飛び出してきたのがヤムだとわかると、すぐに駆け寄ってきた。

「ヤム？ 本当にヤムなのね？」

ヤムはランに手を取られ、顔が熱くなった。

「わたしって、まだまだ修行が足りないみたい。ヤムが今日帰ってくるなんて、夢にも見なかったもの。でもウバは今朝、確かに言ってた。今日はきつと、いいことがあるってね。ウバってやっぱりすごい」

そのウバは、入口の垂れ布を上げて家の中から顔をのぞかせ、孫娘の喜びようをにこやかに見守っている。ヤムと目が合うと、ウバはゆつくりと頷いた。

ささやかな婚礼の日から数えて、日が幾十回か昇り、沈んだ。

アユの村の一員となったヤムは、村人総出でするクリ拾いドングリ拾いにも加わった。ドングリ拾いの日はウバやランと声を交わしながら森を歩き回り、道に迷うことなく村まで無事に帰り着いている。

ヤムがアユの村で過ごす初めての冬が、間近に迫っていた。

ヤムは近ごろ、土偶作りに励んでいる。アユの村に来て落ち着いたころ、呪術師に鍛えられた腕前を披露し、土偶を一体作ってみせた。焼き上がった女神像の出来ばえを見て、村人たちはヤムを褒め称えたものだ。

呪術師のもとで作った土偶はすべて、故郷の村に置いてきた。生まれ育った村へのせめてもの恩返しのため、置き土産として家に残してきたのだ。食料に恵まれたサケの村であつて

もいつの日か、あの土偶が必要になるかもしれない。

いまヤムが取り組んでいるのは、新たな女神像だ。呪術師のところで見たいろいろな土偶の、どれにも似ていない女神を考えている。

こねた土に形を与え、先の尖ったへうで細かい模様を入れていくとき、ヤムは我を忘れてしまふ。そんなときには、自分に何かが乗り移っているような気がする。それこそは呪術師のいう〈神〉なのかもしれない。

神々の中でも最高の神、〈女神〉の姿を、誰も見た者はいない。ヤムも見たことはない。ただ残された土偶を通じて、先人たちが想像した姿を目に浮かべるだけだ。

それでもヤムには、土偶作りをしているうちにそれが見えてくるような気もする。目に見えないはずの女神の姿が、土偶作りに夢中になっっている一瞬、不意に見え隠れする。

ヤムはいつもより多くの土を用意し、丹念にこねていく。今度作ろうとしている女神の像には、モデルがいる。ヤムにとつて、最も身近にいる存在だ。

輝くようなランの笑顔と、まぶしいばかりのその肉体を目にするたび、ランこそ女神の化身なのではないかと思えてならないのだ。

ランに似せた女神像を作ることには、抵抗がないわけではない。土偶はいずれ、壊される運命にある。人々の身代わりとなってさまざまな災厄を引き受けてくださる存在だ。もしもそう

なったら、ランの身が傷つけられるようにも思えて忍びなくなる。

これから作る女神像は、あくまでも女神であつてラン自身ではない。顔の部分は土偶らしく仮面をかぶつたように作り、両腕も思ひきつて省略する。

どうしても欠かせないのは、くびれた腰。

そして豊かな尻と、すらりと伸びた長い脚。

この新しい女神は天に呼びかけるように上を向き、両足を大地に踏ん張つて立ち尽くしている。ヤムの頭で思い描いたように完成すれば、かつてないほど美しき土偶がこの世に現れるはずだ。

「そろそろ夕餉よ。少し休んだら？」

ランの声に振り向くと、どんぐりパンを焼く香ばしいにおいが漂つてきた。

「もうそんなに時が経つたか。秋は日が暮れるのが早い」

ヤムは土まみれの手を洗いに立った。

垂れ布を上げて外に出ると、村はいつのまにか夕闇に包まれていた。家の前に置いた水甕に手を入れ、溜めておいた雨水で手を洗う。そう言えば母も、土器作りのため土で汚れた手を、よくこうして甕の水に入れて洗っていた。母は今ごろどうしているだろうか。元気でいるだろうか、とヤムは思った。

雪が降る前に一度、サケの村へ里帰りして、母に顔を見せてやろう。土産には大きなミミズク
の土偶でも作って、持って行ってやろう。

そんなことを考えながらヤムは手を洗う。

見上げる空には星が瞬き始めていた。

あの夜空のどこかに女神がいて、自分たちを見守ってくたさるのだ。

この幸せがいつまでも続くことをヤムは願わずにいられない。

ヤムは手を洗い終え、愛しい女神の待つ家へと入って行った。

(了)